

## 教職大学院での学びを終えた今

上田 信子

(京都市立洛北中学校教諭)

毎朝、出勤してすぐにその日の授業予定を確認し、前日に準備しておいた教材を机の上に置く。まもなくして学年の打ち合わせ、引き続き職員朝礼が始まる。それが終わると教室に向かい、朝学活で生徒の出欠点検、連絡事項の伝達を行い、数分後には第1時限の教壇に立っている。そして、授業と部活動指導を終えて時計を見ると時刻はすでに18時を過ぎている。

このような慌ただしい日常の中で教科指導・生徒指導・教材研究等において、教員は実に多くの知を使い、適切かつ迅速に意思決定を行い、指導を展開している。私もそのうちの一人だ。ただ、京都教育大学大学院連合教職実践科で修学した今、自分の内なる部分に以前とは異なる明らかな変化を感じている。それは、以前よりも「丁寧に広く深くじっくり」学校教育を見るようになったことだ。「現状はどうか」「何が課題なのか」「なぜその活動が必要なのか」「そうすることで生徒にどのような力を付けたいのか」「本校の生徒に適切な方法はいかなるものなのか」「見通しはどうか」「実施後の評価は」等々を常に念頭に置き、他の教員と協議する。そもそも、学校という組織は前年度を踏襲する文化が根強いが、それにとらわれることなく真に必要なものを見極めることの大事さを意識し、生徒の教育活動にとって最良の案を積極的に考えるようになった。その結果、特に「生徒理解・学習指導・生徒指導・学年経営」における自分自身に変化を感じている。また、他の教職員との協働・保護者や地域との連携・経験の浅い教員のOJTにおいても、考え方や行動が同様に変化してきたように思う。

そして学校経営高度化コースで修学したことで「学校教育政策と行政の動向」に着目し、とりわけ組織としての学校を俯瞰的に見るようになった。「学校改善」「特色ある学校づくり」「戦略」を常に意識する自分がいる。

私が勤務する洛北中学校は京都市の北東部に位置し、生徒数約800名の市内で3番目に大きい規模の学校である。厳しい毎日の連続ではあるが、生徒とのふれあいの中で喜びや幸せを感じる事が多く、それが私の日々の原動力になっている。さて、私には新規採用時より心がけていることがある。それは、あらゆる意味において「バランスのとれた教師であり続けること」である。そして、それは、本連合教職大学院がめざす「人間教師」に似通う。「今日の私は生徒にどのような人間教師に映ただろうか。」勤務の終わりにいつも自問する。

最後になりましたが、一昨年度の連合教職大学院時代には多くの先生方にご指導いただきました。連合教職大学院での学びは、確実に毎日の教育現場における指導のための大きな一つの支えになっています。あらためて心よりお礼を申し上げます。

(学校経営力高度化コース第5期生)